

大阪の笑いと文化

追手門学院大学笑学研究所客員研究員 広瀬 依子

皆さま、こんばんは。広瀬依子でございます。お越しくださしまして、本当にありがとうございます。今日は「大阪の文化と笑い」というテーマでお話をさせていただきますが、最後の10分ほど、映像も見ていただきます。懐かしいと思われる漫才師さんの映像です。よろしくお願いいたします。

さて、先ほど浦先生がお話されましたが、関西の大方の人は笑う。そして、笑うことで幸福度というか、快感が増すということでした。やはり地域によって特性というものがいろいろありますよね。特に大阪には、よく知られている特性がいくつかあります。

まずは、気さくということ。人と人との垣根が低いんですね。

それから、安く買い物ができることを自慢する。先日、私もある人に声をかけられました。「いやあ、ええTシャツ来てるやん。よう似合うてるわ」。そこで思わず言いました。「これ、イオンで1000円で買ったんですよ！」。ありがとうございます前に安く買ったことを口にしてしまう。これはもう、意識に何かがすりこまれているのかではないかと思っています。

そして、何といっても笑うこと、笑わせること。こういう人が大阪では人気を集めます。はるか以前の私の小学生時代もそうでした。今の子どもたちもそうではないかと思いますが、勉強ができる子よりも、スポーツが得意な子よりも、面白い子がクラスの人気者になるんです。これは大阪の大きな特性です。

どうしてこのようになったかを考えますと、社会の成り立ちと関連が深いと言えるでしょう。これは、浦先生の商都大阪のお話に通じます。江戸時代に入り平和が訪れた18世紀初め、大阪の人口は約40万人です。そのうち武士は約4000人。全体の1%です。ところが江戸では人口約100万人のうち武家は約50万人、全体の約半数なんです。將軍家のお膝元ということもありますが、大阪とは町の雰囲気が全然違うわけです。

大阪にはご存じのとおり、大阪城があります。でも、江戸時代の大阪城主、つまりお殿さんは誰？ と言ったらどうでしょう。思い浮かばないのではないのでしょうか。大阪城といえば太閤さんであり、豊臣家のお城だと私たちはずっと思っている。それも当然で、江戸時代の大阪は幕府の直轄地でした。ですから、城主は將軍で、ふだんは大阪城代という役割の人が数年交代で城を預かっ



ていたわけです。今でいえば、江戸幕府株式会社大阪支社長のようなものですね。だから大阪の人びとにとってはあまり馴染みがないわけです。たとえば熊本城ですと「清正公さん」などと呼んで、城主を今も誇りにしていますが、大阪にはそれがない。

大阪では武士に接する機会が少なく、圧倒的な町人社会だったわけです。個々のお付き合いの上で、もちろん年齢や立場などで相手に敬意を払いますが、町人という範疇ではみんな一緒。横のつながりでできている社会でした。

そして大阪の町人には、商売に携わっている人が多かった。「天下の台所」という言葉をお聞きになったことがあると思いますが、たくさんの人や物が集まってきました。食料品も来れば雑貨も来る、各地の物産品も来る。当時は飛行機やトラックはありませんから、主な輸送手段は船です。その船の荷を降ろしてもらった後、空っぽで帰るのはもったいない。そこで大阪の品物を積んで、いろんな地域に持って帰る。東北や北陸から来た「北前船」が有名です。そうすると商いも発展します。

いろんなところからいろんな人がやってくるということは、習慣の違う地域の人たちと接するわけですから。コミュニケーションを取らないと、ものごとがうまく進まない。コミュニケーションの取り方には、しぐさや言葉など、いろいろあります。一番わかりやすくして人の心をほぐすのは笑い、笑顔ですね。ニコッと笑いかけられて、嫌な気分になる人は誰もいません。それどころか、こちらでも思わず笑顔を返す。自然とお互いの距離が縮まる。そういうことが大阪では自然に行われるようになりました。

また、大阪人はこのような遠来の人を歓迎しました。商売を盛んにしてくれる相手ですから当然です。「おのぼりさん」という言葉は、大阪ではほとんど使いません。「おのぼりさん」は、他地域から東京へ出かけていった人のことを指しますが、東京が他地域より優位であるような印象を与えます。余談ですが、江戸時代は実は関西から江戸へ行くことを「東下り」と呼んでいました。上るのではなく下る。というのは、京都には皇室がありましたから、その土地を起点にして見ていたのです。

多様な人びとがやってくるまち、大阪。笑顔が言葉のないコミュニケーションだとすれば、言葉を使ったコミュニケーションももちろん必要です。大阪には、相手を傷つけないようにする言い回しが多いのも、そのあらわれです。たとえば、何かを頼まれたり誘われたりした時。気が進まへんなあ、お断りしたいなあと思ったら「考えときます」。逆にこちらが急いでものを頼みたい時、「急いで急かんねんけど」と添える。急いでいるのかいないのか、どちらかよくわからない。このように、どっちやねん、という言葉が大阪弁には他にもいくつかあります。夏、ものすごい炎天下で「暑い暑い」。これは暑いことをあらわすのですね。

これらは曖昧な言葉とも言えますが、曖昧という意味では、おもしろい例があります。ずいぶん昔ですが、大阪へ初めて来た人が、電車に乗るのにまごまごしていた。駅員さんに「この電車は、どこどこへ行きますか」と尋ねたら、駅員さんの答が「行きます」。「す」なのか「せん」なのか、ど



っちかわからない。正解は「す」です。これは曖昧というよりは省略に入るかもしれませんが、大阪の中ではこれが受け入れられ、暗黙の了解になっています。

私も何度も経験があります。洋服や靴や鞆などを買う時のことです。いくつか見て決めたいので、何軒かまわります。3軒目ぐらいで、いいなと思ったものに出会ったとします。予算内で、デザインも気に入った。けれども、他の店にもっといいものがあるかもしれない。そこで「ちょっと考えます」「また来ます」と言って店を出る。さらに2〜3軒見た後、やっぱり先ほどのものを買おうと再びお店に行くと、店員さんが「いやあ、ほんまに戻ってきてくれはったんですね」。つまり、「ちょっと考えます」「また来ます」はお断わりの返事だと受け止める人が関西には多いんですね。

小売店と買物客のやり取りは、単に必要なことだけを話すのではなく、コミュニケーションのひとつとすることができます。販売する方は、この人はどういう商品を求めているのか、どんな色が好みなのか、予算はどれぐらいなのか、ということをお客さんとの会話の中で探っていく。でも、聞き過ぎてはいけな。ここが難しいところです。初めてのお店に行くと、よく「このあたりにはよく買い物に来られるんですか」「お仕事の帰りですか」「今日はお休みですか」などと聞かれます。これは普通です。でも「何のお仕事をされているんですか」「紙袋を提げていらっしゃいますが、何を買われたんですか」までいくと、踏み込み過ぎになります。

「商は笑なり」という言葉がありますが、笑って商売をしたら、みんな楽しい。売る人は、もちろん利益が上がって嬉しい。自分の店を気に入ってくれて通ってもらえるのも嬉しい。買う方も、楽しく買い物ができたら嬉しい。せっかく買うんやったらあのお店で買いたいなあ、楽しいし、と思いますよね。それが笑うことにつながってくる。

一方の江戸は武家社会ですから、身分がはっきりしています。垣根も崩しようがない。特に平和な時代は、武士は武張っていないと体面が保てません。戦国時代のように合戦ばかりだと、戦って強いところを見せればいいわけですが、平和な江戸時代には実際に刀を使ったり鎧兜を着けることもあまりない。そうすると、どうしても形式を重んじる。武士としての形を作っていかなければならないわけです。

当時言われたのが「武士は3年に片えくぼ」。武士は3年の間に、片方のほっぺたがちょっとへこむ程度に笑えばじゅうぶんだということです。それぐらいしか笑わない。武士にしてみれば、あんまりニコニコしていると値打ちが下がる、そんな心持ちでした。家族の人たちも、武家の者として自分を律して振舞わねばなりません。ですから、武家中心のタテ社会であった江戸では、大阪のように笑いの発達は見られませんでした。逆に言いますと、大阪で笑いが発達していったのは必然なんです。それも、人を傷つけるのではなく、楽しんだり楽しませたりする笑いです。

言葉遊びを比べてみてもよくわかります。東京で使われる「その手は桑名の焼きはまぐり」は「その手は食わない」と「桑名」をかけている。そして、桑名名産の焼きはまぐりを最後に持ってくる。「驚き桃の木山椒の木」は、最後の「き」という音を揃える。「恐れ入谷の鬼子母神」は、江戸言葉の「恐れ入りやす」と鬼子母神のある入谷をかけている。これらは語呂の良さを活かしたも



のですから、聞けばすぐわかります。

ところが大阪の場合は、ちょっと考えて、ああそうか、とわかる。例えば「金槌の川流れ」。金槌は頭の部分が重いのですから、川へ入れると当然頭の部分が下へ下がる。ですから、頭が上がらんという意味です。「ウサギの逆立ち」は、耳が痛いこと。ウサギのあの耳で逆立ちをしたら、さぞ痛いでしょう。「郵便屋のカバン」というのもありまして、大口をたたくことです。昔の郵便配達の方は、口の大きなカバンに郵便物を詰めていましたよね。そこから来ています。ちょっと考えて、そうか、とわかる。そこで言った人と言われた人との間にコミュニケーションが生まれるわけですね。爆笑ではないけれども、クスリとする、ニヤツとする。そして笑いを共有することで親近感が生まれます。

こういう地域性を持つ大阪では、芸能も笑いの要素を持つものが発展しました。よく知られているのは、落語、漫才、喜劇でしょう。落語は、今の落語の祖先というべき人たちが江戸時代に登場しています。示し合わせたわけではないのですが、京都に露の五郎兵衛、大阪に米澤彦八、江戸に鹿野武左衛門と、3か所にはほぼ同じ時期でした。上方落語協会では毎年1回、大阪の生國魂神社でファン感謝イベント「彦八まつり」を開いていますが、この名は米澤彦八にちなんでいるのです。

大阪の落語と京都の落語は厳密にいうと分けられますが、上方という観点でくくると共通点があります。まずは神社やお寺の境内、広場といったような野外で始まっていることです。屋外ということは、道行く人たちの足を止めて、ひきつけないといけない。寄席小屋のような閉じられた空間ですと、お客さんはいったん座ると、そのまま聞いてくれます。でも、往来であれば、近付いてきやすいけれども立ち去るのも簡単。帰ろうかなと思っている人の足を止めるには、笑いをたくさん盛り込むのは効果的です。また、人びとがドッと笑っている傍を偶然通ると、その気はなかったけれど、ちょっと覗いてみようかなという気になりますよね。

また、はめものと呼ばれるお囃子を囃の途中に入れるのも特徴です。三味線、笛、鉦などで賑やかに演出します。今は東京でもはめものを入れますが、以前は上方だけでした。これも野外で行われていたことの名残です。人びとの注目を集める効果がありました。

注目を集めるといえば、上方の落語家は着物の色も鮮やかです。赤、ピンクなども着こなします。明るい色は野外で遠くから見てもすぐわかりますし、見た目にも楽しいものです。東京では、紺、こげ茶などの渋めの色が主流です。というのは、東京落語は座敷芸として始まりました。座敷ということは、呼んでくれるお客さんがいる。そのお客さんより派手なものを着るのは気がひける。けれどもボロボロの衣装ではいけない、と控えめな着物が主流になりました。

かんじんの笑いの部分で言いますと、上方落語は爆笑物が好まれます。関西のお客さんは、落語には必ず笑いがあると思っていられっやんの方が多いのですが、必ずしもそうではない。特に江戸では人情囃の「芝浜」とか怪談の「牡丹燈籠」とか、笑いも入っているけれども物語を楽しもうという囃にも人気があります。

それから喜劇では、今、定期的に公演を行っているのは松竹新喜劇と吉本新喜劇です。以前は東



宝系の喜劇劇団やテレビコメディもあり、「番頭はんと丁稚どん」「やりくりアパート」などをご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、今は定期的な放送や上演はほとんどない状態です。比較的小規模で喜劇を上演しているところもありますが、ある程度の規模となると、松竹新喜劇と吉本新喜劇がよく知られています。

松竹新喜劇は、曾我廼家劇というお芝居が源流です。もともと歌舞伎俳優だった曾我廼家五郎、曾我廼家十郎という2人が作り上げました。ここを源にたくさんの喜劇劇団や集団ができ、離合集散を繰り返し、戦後、松竹新喜劇に収斂していきます。

先代の渋谷天外さんと藤山寛美さんがいらした頃の松竹新喜劇を覚えていらっしゃる方も多いでしょう。寛美さん時代には、本拠地の道頓堀・中座で244か月連続公演を行いました。18年半です。当時の松竹新喜劇は基本的にひと月公演ですから、18年半、ずっと公演していたわけです。大阪の人びとがいかに喜劇を求めているかがわかります。

藤山寛美さんが亡くなった時、私が購読していた新聞では、朝刊の1面左肩に大きく掲載されました。芸能担当の新聞記者に聞くと、1面に計報が載るにはある程度の基準があるそうです。芸能人なら人間国宝、文化勲章受章者、文化功労者、それに準じるような功績を挙げた方などです。新聞の1面右側はトップニュースで、左側は二番目のニュース。ですから、寛美さん死去は大阪にとってどれだけ大きなことだったかがわかります。

先ほど申しましたように、松竹新喜劇は歌舞伎俳優が源流ですから、物語性で見せていくのが主流です。公演場所も劇場です。一方の吉本新喜劇は寄席で上演していることもあり、演芸との距離が非常に近い。例えば元漫才師で後に吉本新喜劇の俳優になったという方はたくさんいらっしゃいます。役者さんが定番ギャグを持っているのも演芸に近い。そのギャグを言うことで、お客さんが喜ぶのです。

また、役名が芸名と基本的に同じです。全く同じでなくても、井上竜夫さんのおじいさんは「竜じい」、辻本茂雄さんのおじいさんは「茂じい」など、つながっている。こういう作り方は、演じ手が役と自分の間を行ったり来たりできます。

その点で共通しているのは漫才です。漫才はもともと「万歳」と書きます。扇を持って舞う太夫という役割と、鼓を持って面白いことを言う才蔵という役割。この2人が1組になって、音曲とともに新年や新築等のお祝いをする内容を中心に行っていました。鼓を持っていた漫才師の砂川捨丸さんは、この万歳を取り入れていらしたのですね。

漫才も芸名と役名の間を行き来します。芸名で世間話のようなことをするかと思えば途中で設定が変わることがあります。あなたは先生、私は生徒になって、ちょっとやってみましょう、という感じです。でも、その話題が終わると、また元の芸名に戻る。だから、漫才とコントは違います。コントは初めから終わりまで役名です。

漫才ではスポーツ、家族、食べ物など、身近な話を取り上げることが多いですね。2人の人間が一見雑談でありながら、それらのおしゃべりを笑いを主にした芸として確立させていく。江戸時代



から続く豊かなコミュニケーション能力を身につけていた大阪人は、そういう手腕を持っていた。

これらは「しゃべくり漫才」と呼ばれます。作り出したのは、上方漫才の父と言われる秋田実さんです。ご自身で台本を書かれる漫才師の方も多くいらっしゃいますが、秋田さんは漫才作家という立場を確立、会話だけで進行させる笑いを創造されたのです。後のディスカッションコーナーにご登場いただく漫才作家の藤田曜先生は、秋田先生のお孫さんです。

その秋田さんが心がけられたのは、家族の誰もが安心して笑える笑いです。ブラックな笑いも時にはいいのですが、やはり皆が安心して笑えること。そういう漫才を作られました。みんなが共感できるということは、誰も嫌な気持ちになりません。

では、せっかくの機会ですので、藤田先生の書かれた作品の映像をこれから上映いたします。皆様、一緒に拝見しましょう。演じられるのは夢路いとしさん、喜味こいしさんです。先年亡くなりましたが、多くのファンを持つ漫才師さんでした。また、秋田先生と何度も一緒に仕事をされ、たくさんの作品を上演してこられました。おじいさまとお孫さん、両方の作品を演じられたというわけです。

それでは、藤田先生作の漫才「ファーストフード初体験」をご覧くださいましょう。

(ビデオ上映)

ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。私も講師の立場を忘れて、すっかり笑ってしまいました。本当にみんなが共感できる漫才で、おじいさまから続く系譜を感じます。

先ほども申しましたが、ブラックな笑いもあっていいと思うのです。社会への批評、批判は必要です。ただ、基本の楽しい笑いがあるからこそ、ブラックな笑いも面白いということは、忘れてはいけないのではないのでしょうか。

このように楽しく、皆が共感できる笑いを作って下さった秋田実さん。そういう方を生み出したのは、大阪の風土と密接に関連しているのです。今日お越し下さった皆様は笑いのお好きな方ばかりだと思います。どうぞこれからも笑いを大切に、楽しい日々を過ごして下さい、嬉しい限りです。